

還暦サイバー



帯広市医師会
十勝いたみのクリニック・びかた・こし・びざ診療所

野坂拓寿

ペインクリニックを開業して、早いもので23年目になる。

なんと、今年還暦も迎える。

痛みの感じ方は人それぞれ、数値で表すのは難しいので当院ではなるべく問診に時間をとっている。人によって、なかなか肝心のことを聞けなかったり、治療に関係ないことや、逆にこちらが質問を受けたりすることもある。

「先生はどこの大学出たの？」

「旭川医大です」

「あっ、先生も～。あたしも朝から痛いです！」

とりあえず様子を聞いたので、カルテにはちゃんと「朝から痛い」と書いておいた。

因みに当院ではまだ電子カルテを投入していない。環境保護で紙削減だ、デジタル化だと近々どうにかしなくては、と思っているがこのままで済むなら、なんとかのらくらとやっていきたい。

面倒臭いのである。コロナ以降、今までできたことができなくなったり、やらなくてよかったものをしなくちゃいけなくなったり、はっきり言って右往左往の毎日だ。それでも、ちょっと前まではすぐ新しいことにも対応できたのになぁ～と思ってしまった。

患者さんと話していてもよく、この「ちょっと前」が出てくる。

実際聞いてみると「まだ子供が小さかった時は、疲れていてもとりあえず寝れば痛いのも治ったのにねえ」ってお子さんさっき一緒にいた人だよ、60代だよ、それって半世紀前じゃない、と脳内ツッコミしてしまった。でも、自分も前はもっとできたけどなあ、と思う時はやっぱり20～30代前半あたりを基準にしていることに気づいた。今年還暦だから4半世紀以上前。人のことは全然言えない。そもそも若い頃の余裕スカスカの頭に手当たり次第何を詰め込んだって、なんとかなのである。歳をとると、確かにメモリの容量は落ちたが、結構ちゃんとインデックスができていたので意外とやっていける。

これを経験値というのであろうか？ 年齢は逆行できないのだから、やれなくなったことを嘆くより、昔できなかったことを見つける方が楽しい。還暦を迎えたからといって、「よくぞここまで生きのびた！ じいちゃん偉いよ、後はのんびり余生を楽しんでね」などと今の時代誰も言ってはくれないし、そもそも自分自身現役を疑っていないしね。強かなサイバーになって、そのうちどの患者さんより院長が一番高齢のクリニックになってみたいものだ。

12年前の自分



札幌医科大学医師会
札幌医科大学附属病院

藤野景子

年女ということで新春随想のご依頼があり、はて前回の卯年には何をしていたかしらと数えてみたところ、東日本大震災の年だったと気がついた。私は宮城県の出身で、大学入学前までを仙台で過ごした。あれから12年経ったかと故郷に思いを馳せた。

震災当時、私は札幌医大の4年生だった。両親は無事だったが、東松島市に住んでいた祖父母は車ごと津波に吞まれて亡くなった。訃報を聞いた時、傍目に私がどんな状態だったのかわからないが、友人たちが急遽、私の自宅に集まって食事の世話をしてくれた。「両親は生きていますし大丈夫」という私に、皆「大丈夫じゃない、平気じゃない」と言ってくれたのを今でも覚えている。

4月からは5年生に進級して臨床実習が始まった。1～2週ごとにさまざまな診療科をローテートするわけだが、必ず先生たちから挨拶がわりに部活と出身校を聞かれる。宮城出身とわかると毎回セットのように「地震（津波）、大丈夫だった？」と聞かれる。ほぼ初対面の先生に「祖父母が津波で亡くなって…」と話すのはその都度空気を重くしそうで、またこの質問が来た、と思いつつ「津波は来たけど両親は無事だったので大丈夫です」と答えていた。

救急科を周っている時、飲み会の場だったと思うのだが、隣に座った指導医からやはり部活と出身校を聞かれた。いつも通り仙台出身と答えた私に、その先生は「大丈夫だった？」とは聞かず、ただ一言「大変だったね」と言った。震災直後、DMATとして岩手県へ行った先生だった。私は予想外の返答に驚いて、いや両親は無事だったし父の職場も再開したし大丈夫、と返したのだが、先生は重ねて「それでも大変だったね」と言った。私はこの時初めて、祖父母が亡くなったことを大学の先生に打ち明けることができた。「大丈夫じゃないじゃん！」と言われて、ああ私ちょっと大丈夫じゃなかったんだ、この先生は大きく損なわれた東北を見たのだ、と思った。

その後、その先生を追って救急医療の道へ…となれば話としては美しいのだが、そうはならず母校の泌尿器科に入局し、医師10年目を数えた。忙しい診療の中、安定している患者さんたちはさっと診てしまいがちだが、「本当に大丈夫？ 実は困ってない？」と聞き返す、癌治療中のさまざまな副作用が出た患者さんを診るとき「大変だったね」と声をかける。その心がけを思い出す度、本当は大丈夫じゃなかった12年前の自分が、過去から今の私を見ているような気がする。